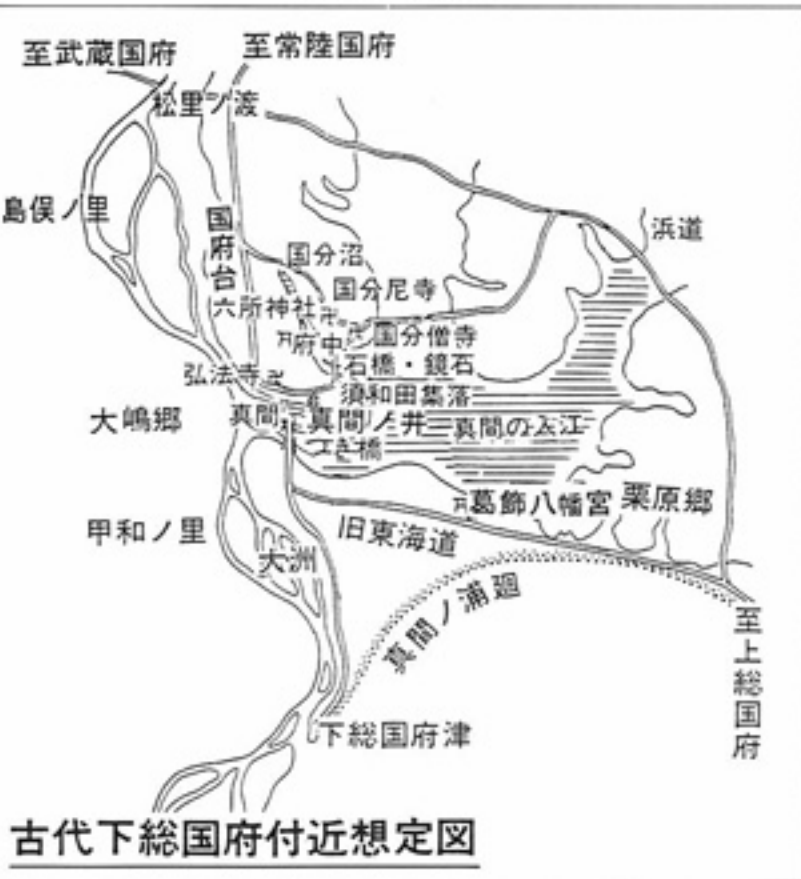


文学の散歩道

# 万葉のみち



市川市教育委員会

## 万葉集と葛飾の真間

奈良の都が栄えた時代、市川市の国府台には下総の国を治める国府(役所)が置かれ、その東に当たる国分の台地には国分僧寺と尼寺とがいらかを競って建ち並んでいました。また南の谷津を隔てた須和田には、多くの農民が居住し、営々として田畑の耕作に従事していました。

当時、都から相模の国(神奈川県)を経て上総、下総(共に千葉県)常陸(茨城県)へと通じた街道を東海道(後に相模から武蔵=東京都へへと変わります)とよびました。

この街道は縄文時代の末ごろ、市川市の北部に広がる下総台地の前面に、東西に細長く形成された市川砂州の上を通ったもので、ほぼ今日の国道14号線に相当するものと考えられます。

市川砂州の南に広がる海岸線が「真間の浦」と呼ばれ、北側と台地の間の低地には、河水が滞留して江戸川に口を開いた「真間の入江」がつけられていました。この開口部には幾つかの洲が出来ていて、この洲から洲に架けられた橋が「真間の継橋」と呼ばれたものと思われます。

都からはるばると東海道を下った役人達の間には、これらの風景に感じて歌を詠み、台地下に湧き出る「真間の井」で喉を潤し、またこの水を汲む手児奈の伝説を聞いて歌を作った人もおりました。

これらの歌の始めには「葛飾の真間」と地名が読み込まれているものが多く、葛飾は今日の江戸川流域一帯のかなり広い範囲を称したものであり、その下総の国葛飾郡に属した真間の地は、国府の置かれた台地の南に広がる地域を指したもののようです。

山部赤人や高橋虫麻呂は万葉歌人のひとりです。下総国府にきた折り、真間に伝わる手児奈の伝説を聞いて、それぞれ思いのままに手児奈を歌いあげました。彼等の歌を始め、真間周辺を題材とした歌が万葉集に留められます。しかもこれら「葛飾・真間の継橋・真間の井」などが引き続き、平安時代から近世に至るまで歌い詠まれてきています。

戦国時代、弘法寺の日与上人は手児奈の霊に感じて、その奥津城(墓)の跡と伝える地に霊堂を建てました。これが今日の手児奈霊堂です。この時代の真間の地は戦乱に荒れ果てていたものと思われる。その情景は上田秋成の雨月物語にもよく描写されています。

このような時代の移り代わりにより、江戸時代には既に万葉の遺跡が忘れ去られようとしていました。このことを憂いた鈴木長頼は弘法寺の日貞上人と語り、継橋、霊堂、真間の井と、それぞれの跡に碑を立てました。これが今日に残る真間の三碑で、今を去る290年前のことです。

日本最古の歌集「万葉集」の作られた時代に通り、文学の散歩道として、ここに「万葉の道」を設定いたしました。古き時代の人々の伝承の跡を万葉歌を口ずさみながら巡り歩くのもまた、市川市ならではの文学コースの一つと思います。

## 万葉集

現存する我が国最古の歌集で、撰者については古来諸説があって明らかではないが、数次にわたって編纂され、巻数が増えたものと思われます。そして現在の型に近いものに編集したのが大伴家持と考えられ、20巻になったのは奈良時代末、宝亀年間(770~781)から延暦初年(780年代)の頃と推定されます。

歌数についても諸説がありますが4,536首を数え、その内訳は長歌265首、短歌4,207首、旋頭歌62首、連歌1首、仏足跡歌体歌1首です。作者については名を記す者530人、天皇、皇后、皇族、王族、大臣ら高官をはじめとする貴族、官僚達から、僧侶、農民、兵士たち、さらに遊女から門付芸人、乞食に至るまで多彩であり。作者未詳の歌が半数を占めています。

作品の時代は通常次の4期に分けています。  
 第1期(壬申の乱まで)は専門の歌人が少なく、素朴な歌謡が多い。  
 第2期(奈良遷都まで)最盛期で柿本人麻呂が活躍。  
 第3期(天平5年(733)まで)は山部赤人、大伴旅人、山上憶良たち。  
 第4期(天平宝字3年(759)まで)は大伴家持が活躍。

### 真間を題材とした万葉歌

われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児奈が奥津城処	山部赤人
葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ	山部赤人
勝鹿の真間の井を見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ	高橋虫麻呂
足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ	作者未詳
葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人騒ぐ波立つらしも	
葛飾の真間の手児奈をまことかもわれに寄すとふ真間の手児奈を	
葛飾の真間の手児奈がありしかば真間の磯辺に波もとどろに	
鳩鳥の葛飾早稲を賈すともその愛しさを外に立てめやも	

# 万葉のみち



- 真間の三碑所在地
- 説明板・案内板所在地
- 万葉歌説明板所在地